

俳句って、 楽しいな!

藤塚小学校の教室から

藤塚小学校が取り組む俳句の授業をレポート。みんな元気いっぱい上手な句を作っているよ!



さあ、
早速俳句を作り
ましょう!

「理科の自然観察の後にも俳句を詠ませています」と千葉先生。



「花と俳句と実りの学校」が
藤塚小学校のテーマ

どんぐりが風に落とされどころろりん
コスモスは風にふかれておどどてる
やきいもは今がしゅんだよほくほく

個性豊かなこれらの俳句は、藤塚小学校
3年生の児童による作品。

藤塚小学校は「花と俳句と実りの学校」
をテーマに俳句の授業を取り入れている、
市内でも特色のある小学校だ。



23

14

市内の俳句会会長が
授業をサポート

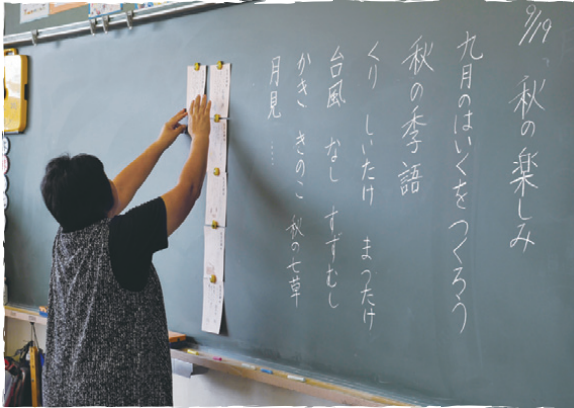
俳句の授業は、1年生から6年生まで、月に一度、それぞれ国語の授業の枠で行われている。時間内に一人一句を作るのがルールだ。

全校児童の句が集まると、市内の俳句会「東鳳会」の小山愛子会長の元へ届けられる。小山会長は、同校の元PTAで、長年、子どもたちのために俳句の授業をサポートしているのだ。届いた句に目を通して、俳句仲間と共に、各クラスの優秀作を選句する。

選ばれた作品は、校内の特別な場所に貼り出され、「小山愛子先生選」として学校だよりも掲載される。選句があることで、子どもたちのモチベーションはより高まっている。



各クラスの優秀作品は、毎月校長室前の廊下に短冊にして掲示される。



出来上がった俳句を清書し、イラストを描き添えたら完成!



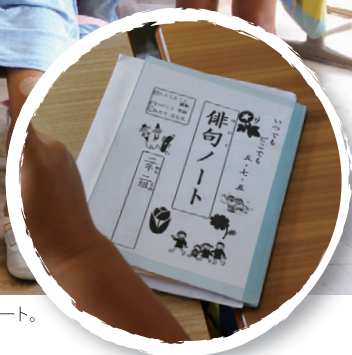
「季語を覚えるのが楽しい！」
と子どもたちからも大好評

俳句の授業が行われていたのは3年1組。テーマは「9月」だ。この日は小山会長が指導にかけつけていた。

担任の千葉博子先生が、「秋の季語で9月にふさわしいのは何ですか」と質問すると、「くり」「しいたけ」「月見」「鈴虫」と、子どもたちが元気に答える。

わからない季語が出てくると、「どんな虫だろう」「どんな鳴き方をするか」と二つずつみんなで考えていく。ひと通り季語を出し終わると、実際の俳句作りに取りかかると、1分もしないうちに作り終える子もいれば、指を折って五七五を数えながらじっくり考える子もいる。出来上がった句に対して、千葉先生や小山会長がアドバイス。どの子も最終的にはしっかりと一句を作り終える。大人も見過ごしてしまいがちな日本の四季を、俳句を通していいいに学んでいく授業だ。

俳句の授業は子どもたちからも好評。「季語を考えるのが楽しい」(尾花慎之介くん)、「五七五と組み合わせを考えるのが好き」(関 遥香さん)、「どんな季語があるのか知っていくのがうれしい」(田中彩子さん)と、俳句の授業を楽しんでいる。



全児童が使っている俳句ノート。

みんな上手。
選ぶのが
楽しいわ



「俳句は頭の体操になる。若い人にどんどん挑戦してほしいです」と小山会長。

俳句は子どもたちに 平等にチャンスを与える

そもそも同校で俳句の授業が始まったのは、かつて教務主任を務めていた関根東彦先生（故人、俳号関根東鳳）の発案。30年以上の歴史がある。続いてきたのは、それなりの理由がある。

「俳句は教育効果がとても高い。子どもたちは語彙が少ないのですが、季語を出し合うことで初めての言葉を学んでいくことができます。自然を対象に詠みますので、いろんなところに目が向くようになります」と千葉先生。

隣で聞いていた小山会長もやさしくうなずいて言う。

「俳句からの学びは大人も子どもも一緒。俳句を始めると、自然をしつかりていねいに見るようになります。道を歩いて花を見つければ、『何の花だろう』と興味を持ち、『いつ咲くのだろう』と季節に思いを馳せる。花鳥風月を見る目を養えるのです。特にお子さんは感性が鋭く、見たものを素直に表現できるから、見ていると、ときどきはつとめる句に出合うこともあります」

俳句は才能ではなくて、一瞬一瞬の感性がものをいう。だから、初めて句を詠んだ人が特選に選ばれることもあれば、逆に先生クラスでも選ばれないこともある。そこが俳句の面白いところ、と小山会長は言う。

「たしかにそうですね。作文を書くのは苦手だけど、俳句は得意という子どもいます。勉強が苦手な子も含め、俳句はすべての子に平等に選ばれるチャンスがある。選ばれば、自ずと自信につながります」（千葉先生）

子どもたちの感性や 五感を磨いていきたい

藤塚小学校では、平成19（2007）年から全校生徒の句を載せた藤塚小学校児童句集「笑顔いっぱい」を制作。第7集まで発行している。さらに、平成24（2012）年には「藤まつり」の俳句大会にも参加。平成26（2014）年からは子どもたち自身による選句も始めるなど、新しい試みへのチャレンジも欠かさない。

最後に吉田弘子校長に今後の俳句の授業への期待を伺った。

「6年間俳句を学んで積み重ねていくと、大きな力になります。実際、学年を追うごとにいい作品に仕上がっていくのがわかるんですよ。これからも、俳句の授業を通して、自然を目で見たり、触ったりさせながら、子どもたちの感性や五感を磨いていければと思います」